学びやタイムスリップ

⑲ 朝永博士の母校訪問 （昭和時代）

優しい口調で思い出語る

1965（昭和40）年、朝永振一郎博士がノーベル物理学賞を受賞したというニュースを受けて、出身校である左京区の錦林小は喜びにわきました。当時の同級生たちが学校に集まり、在学時の様子が分かる資料などを展示した朝永コーナーが校内に設けられたり、博士に続く子どもをと理科室が拡充されたりしました。

そして、直接子どもへ講演をしてもらいたいと依頼がされ、66（同41）年2月12日、朝永博士の来校が実現したのです（写真①）。子どもを前にして、「自分の小さい時はたいへん弱虫でしてね…」と、優しい口調で自身の幼いころの思い出を語ったといいます。

朝永博士は1906（明治39）年東京に生まれ、哲学者だった父親が京都帝国大学の教授になったことをきっかけに小学1年のとき京都へ移りました。体が弱く、病気がち、繊細でよく泣いていた子どもでしたが、理数科目の勉強は幼いころより好きだったといいます。

このころ、小学校では運動場や体育館に生徒を集めて、鉄の針金を酸素中で燃焼させたりするなどの理科実験がよく行われており、こうした経験を通してもよく物理や化学に触れていたのでしょう。その後、京都一中、第三高等学校、京都帝大へと進み、物理学の道を探究することになりました。朝永博士が錦林小来校の際、将来を担う子どもたちのために贈った「のび行け錦林の子」と書かれた色紙は、今も大事に伝えられています（写真②）。

同じく錦林校の出身に、文化勲章も受章したフランス文学者の桑原武夫がいます。戦後、京都大学人文科学研究所を拠点に、新京都学派として日本の人文科学研究を主導しました。実は、1963（昭和38）年から69（同44）年の時期、学界を代表する日本学術会議の会長を朝永振一郎が、副会長を桑原武夫が務めていました。錦林校の校長はこれを喜び、「日本の学界は、わが錦林校が支えている」と冗談を言ったそうです。2人の偉大な先輩の存在は児童の心の励みとなっています。

（京都市学校歴史博物館 学芸員 森光彦）

写真1 ノーベル賞受賞後に母校を訪れた朝永振一郎博士（1966年、錦林小提供）

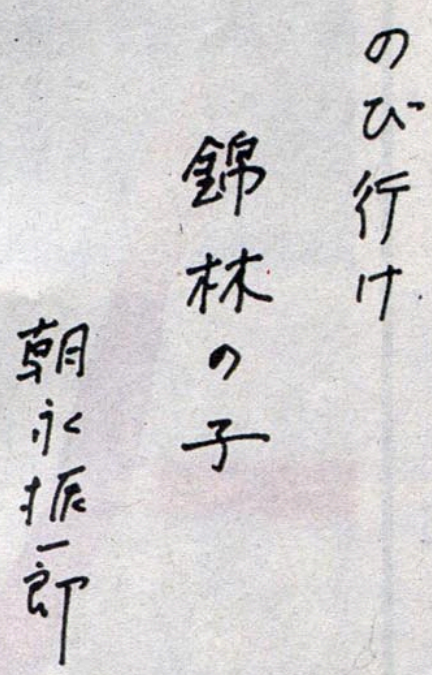

写真2 朝永博士が錦林小に贈った色紙